

ikecoco
“住む人が主役の家づくり”に、もっとファンを!

2026年
50号記念特集

特別インタビュー

堀部安嗣 自邸から読み解く設計プロセス

自然と性能を両立させる
住宅設計とは



建築家が自らの住まいを設計するとき、その空間には設計思想だけでなく、日々の経験から培われた感覚や判断が率直に表れる。建築家・堀部安嗣が手がけた自邸もまた、住まいの快適さとは何かを、自らの暮らしを通して確かめるために計画された住宅である。性能が重視される現代の住宅において、光や風、素材の質感といった身体的な感覚をどのように設計へ取り込むのか。本誌では、自邸での実践を手がかりに、自然と性能を両立させる住宅設計の考え方を紹介する。建築が生まれるまでの思考と判断のプロセスを、建築家自身の言葉からたどっていく。

住まいを考え始めるとき、設計者は何を手がかりにしているのか。

—ご自身の家である堀部邸を設計する際に、最も重要視したことを教えてください。

堀部安嗣（以下、堀部）建築の設計というのは、どうしても視覚情報＝ビジュアルが中心になってしまう傾向があります。たとえば家を建てる時、間取りや完成予想図、CGなど、そうした視覚的なものが大きなウェイトを占めがちです。けれども実際に設計をしていると、家というのはもっとトータルな感覚を駆使して、快適性を総合的に割り出しているものなんです。たとえば、こんな匂いがするとか、足触りや手触りがこうだとか、こんな寒さなんだな、というような。視覚中心で家づくりを進めてし

まうと、どうしてもそうした“ビジュアル以外の感覚”が手落ちになってしまう。自分自身、これまでの経験を通して、そういう五感を大事にしないといけないと感じてきました。そして、そうした感覚が暮らしや身体にどう作用しているのかは、自分が実際に住んでみなければ正確には分からないと思うんです。だからこそ、自分の家をつくるのであれば、そうした全ての感覚を自分の身体でしっかりと感じられるような家になりたい——そう思いました。





—この空間にいると光や風が自然に取り込まれているのを感じます。暮らしの中で、空間の役割をどのようにお考えですか。

堀部 最近は、高断熱・高気密化がどんどん進んでいて、それ自体はとても大切なことだし、決して悪いことではないと思っています。ただ、高断熱・高気密という性能だけが一人歩きしてしまうと、窓を開けなくなってしまうんですね。そうすると、空調や換気のコントロールが全て機械に依存していく傾向がある。さらに言えば、ここ数年の夏の厳しい暑さもあって、窓自体がどんどん小さくなっていく。そうすると、季節や地域、風土との接点といったものが、どんどん乏しくなっていく方向に進んでしまうのではないかと。そうした危うさを、強く感じています。

自分の暮らし、そして自分が設計する建築も、そういう方向に陥らないようにするには、どうすればいいのか。高断熱・高気密の流れと、自然の揺らぎや風土、天候の変化といった恵み。その両立をどう図るかは、非常に大事なテーマだと思っていて、自宅ではそのテーマを自分なりに意識して設計しました。たとえば、風が気持ちいいとき、天気がいいときには、その状態を自分の手でつくり続けられるような。いわば“調整の余白”を持つ家。楽器にたとえるなら、日々チューニングを続けていくような、そんな家をつくりたいと思ったんです。

“自然”と“心地よさ”を、無理なく成り立たせるための設計。

—木や左官の質感、差し込む光の陰影など、素材の表情がとても印象的です。こだわった素材や仕上げについて教えてください。

堀部 私は、いわゆる自然素材大好き人間でもなければ、自然崇拜主義者でもありません。これまでの仕事でも、新建材や近代以降に生まれた素材に対して、嫌悪感を持っているわけではないし、むしろそういうものも上手に使っていきたいタイプなんです。

それでも、数百年、数千年と使われ続けてきた素材——人々が当たり前に扱い、技術を磨いてきたものに対しては、やはり敬意を表さざるを得ない。近年、そう強く感じるが増えました。

なぜかという、そうした“当たり前”の素材や技術が、今まさに失われつつあるからです。こんなにすごいものが失われていって本当にいいのか、という思いから、昔からある素材を意識的に見直すようになりました。たとえば無垢の木、石、瓦、漆喰や土。これらはなかなか現代の素材では、叶わない存在です。

私たちは数百年、数千年、あるいはそれ以上の時間を、そうした素材とともに暮らしてきました。それが現代になって逆転する、というのは考えにくいんですね。どんなに現代の技術をもってしても、そうした素材を超えることは難しい。その認識が、自分の中でますます深まっている気がします。

—断熱や蓄熱といった温熱環境の要素は、住宅の素材選びにどのように影響してくるとお考えですか。

堀部 自然素材への評価が自分の中でぐっと高まったのは、まさに温熱性能や断熱性能といった要素を意識的に考え始めたことがきっかけでした。

たとえば無垢の木というのは、うまく使えば断熱性能もあるし、蓄熱性能もある。さらに調湿性能もあり、香りによるリラックス効果まで備えている。一つの素材の中に、これだけ多様な機能が詰まっているというのは、ちょっと他にないんじゃないかと思っています。そもそも断熱性能と蓄熱性能というのは、

基本的に相反する関係にあります。断熱は軽い素材、蓄熱は重い素材。それを両方兼ね備えることは、人工的にはほとんど不可能なんです。そこにさらに木の“多孔質”という性質による調湿機能が加わってくる。本当によくてきた素材ですね。新素材でも、これほどバランスの取れたものはなかなかないと思います。しかも木は、内装材にもなるし、構造材にもなる。縁の下の力持ちでもあり、主役にもなれる。そんな素材を私たちは長い時間をかけて使い続け、その技術を積み上げてきた。それを生かさずにどうするのか、という気持ちになります。星の光って、何十年、何百年、何万年前に発せられたものが、ようやく今、私たちのもとに届いているんですね。建築の素材や技術も、そうした光のように、これから数十年、数百年後の人たちに届くようなものにしていくこと。それが、今の私たちが“発する”ことをやめてはいけない理由だと思っています。



——これからの日本の住宅は、どのような方向に進んでいくとお考えですか。

堀部 高断熱・高気密化、つまり外皮性能を高めていくこと自体は、本当に大事なことだと思っています。ただ、最近の社会全体の傾向として、物事を単純化してしまう流れが強い。多面的・複合的に捉えることなく、一つのテーマやキャンペーン的な考え方が一人歩きしてしまうんです。外皮性能を高めることは、省エネにも貢献し、身体的にも楽になる。確かに、それは良いことです。でも、それだけが“これからの家の全て”になってしまうのは危うい。

そうならないためにはどうすればいいか、ということをずっと考えています。この家でもそうですが、工夫の結果として、高い外皮性

能を持つG2クラスの断熱エリアがある一方で、その外側には、自然の揺らぎや季節の変化、空気の気持ちよさを感じられるスペースがあります。そういう場所では、予期せぬことが起きます。ヘリコプターが飛んだり、虫が入ってきたり、気持ちのいい風が吹いたり。そうした“予期せぬ感動”や“予期せぬ快適さ”を受け入れられる空間。そういう場所が、人間の暮らしには欠かせないと思うんですね。つまり、人が完全にコントロールできる安定した領域と、コントロールできない自然の領域。その二つを合わせ持つ家ができないか、ということを常に考えています。さきほどの話にもありましたが、この家では

——木繊維断熱材シュタイコを導入いただきました。実際にひと夏を過ごされてみて、室内の快適さはいかがですか？

堀部 結論を言うと「めっちゃ快適」です。

とはいえ、僕は基本的に謙虚な人間なので、あまりこういう話はしないタイプなんです（笑）。何というか、「快適」とも思わないんですよ。妻ともよく話しているんですが、「無」なんです。そういう分野に詳しい方に聞いても、まさにそれが理想形だと。本当に快適な空間や環境というのは、快適とも不快とも感じない。そこが最高峰なんです。

つまり「あるべくして、ある」という状態。真夏、外気が35度くらいなのに帰宅すると、普通の家なら冷房をかけっぱなしにして「涼しい」と感じるでしょう。でも、この家では、そういう感覚ではないんです。中に入ると「何もない」。何も引かかるものがなくて、ただ自然に馴染む。涼しいとも思わない。でも、ちょうどいい。全くやせ我慢ではなく、本当に「ちょうどいいところに戻ってきた」という感覚です。森の中の木陰に入ったときの感覚に、近いのかもしれない。

窓をよく開けます。断熱性能の高い外皮であっても、蓄熱量がしっかりあるので、窓を開けてもびくともしないんです。冬に窓を開けると普通の家ならすぐ冷えてしまいますが、この家は内部にたっぷり熱を蓄えているので、少し冷たい空気を取り込んでも、空間全体が大きく冷え込むことはありません。

外皮性能の高いエリアと、揺らぎのあるエリアが“持ちつ持たれつ”の関係になるのがいいんですよ。面白いんです。

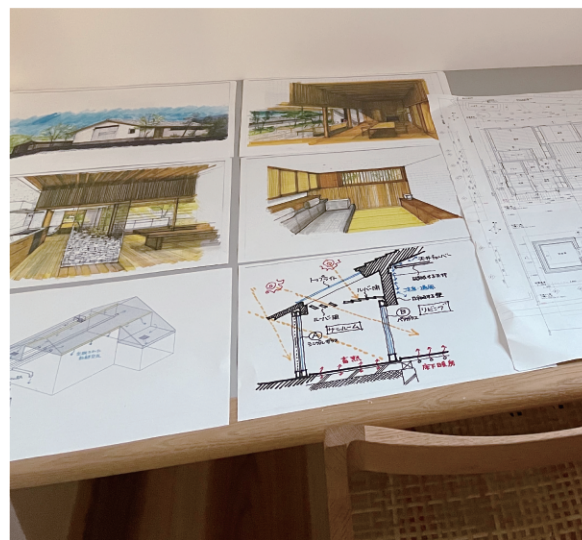
それは、ここにある薪ストーブも同じです。高断熱・高気密のエリアの中にあると、みんな使わなくなるんですよ。必要性を感じないので。機械空調が全てをコントロールする環境だと、逆に薪ストーブの居場所がなくなってしまふ。でも、こうした少しラフな空間だと、薪ストーブがものすごく活躍するんです。多少、煙が漏れても気にならないし、灰が舞ってもいい。

だから冬もよく使いますし、火を焚くとこの空間がいちばん暖かくなる。すると扉を開けて、他の部屋に“お裾分け”をする、そんな循環が生まれるんですね。

——日本の住宅は、まだ効率やコストが優先されがちです。そうした中で、設計者やつくり手は空間・素材・温熱環境へのこだわりをどのように守るべきでしょうか。

堀部 やはり、なるべく過不足のない範囲で、小さくつくった方がいいと思いますね。特に高断熱・高气密のようなエリアは、コンパクトにした方がコントロールしやすい。燃費も良くなるし、維持管理もしやすい。スモールであるということの中に、質の高さを見つめ直す価値があると思います。そうすればインシャルコストも抑えられますし、何より納得がいかないのは、「省エネや環境負荷低減のため」と言いながら、逆に大きな家をつくってしまうケース。これは非常にナンセンスだと思います。結果的に、省エネにも環境負荷の

低減にもつながらない。建築には“適正規模”というものがあると思うんです。大きくなれば、初期費用だけでなくランニングコストも増える。一方で、物理的には小さくても、設計の工夫次第で広がりを感じる空間にできるし、小さいからこそ庭を広く取って、より伸びやかな暮らしができる。そうした“スモールの豊かさ”に、これからもっと意識を向けていべきだと思います。



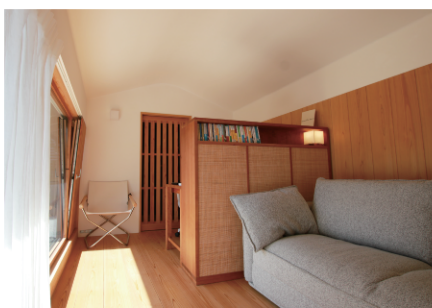
住宅設計という仕事のなかに見える、建築家のまなざし。

——これまでも、日本の風土に合った建築は「土と木の伝統建築」にあるとお話されています。そうした考えを、これからの建築にどのように生かしていこうとお考えですか。

堀部 今の時代、土や木、石だけで建築をつくるのは、正直かなり難しいでしょう。ほぼ不可能に近い。ですから、近代・現代の素材や工法、仕組みをうまく活かしながら、それらを尊重して使っていくことが大切だと思います。共存していく、ということですね。僕の考えとしては、自然素材を主役に据えて、新建材を脇役に抜擢する。そうすると、お互いの長所と短所を補い合いながら、良いバランスで建築が成り立つように思うんです。この家もそうです。主役としての自然素材が目立ちますが、その背後では新建材がしっかり支えてくれている。たとえば透湿防水シートがなければ、こうした構成は成立しません。瓦の下のルーフィングも同じですし、断熱材そのものも新建材ですよ。だからこそ、そうした

現代素材にも敬意を表したいです。そう考えると、建築がとても楽しくなるんですよ。おじいちゃん(=自然素材)には主役になってもらい、若い人たち(=新建材)がそのおじいちゃんやおばあちゃんを支える——そんな関係性ですね。木造の金物もそうです。ホールダウン金物なんて、うまく使えば木をしっかり支えてくれる。正倉院の中にも、実は金物がたくさん使われているんですよ。昔から、そうやって“若者”が“長老”を支える関係はあったんです。新建材の良さを感じると、同時に昔からの工夫や知恵のすごさにも気づける。つまり、新建材と自然素材は別々のものではなく、互いを映す鏡のような関係にあるのではないのでしょうか。新建材の性能を理解すれば、逆に自然素材の深みも分かる。そうやって行き

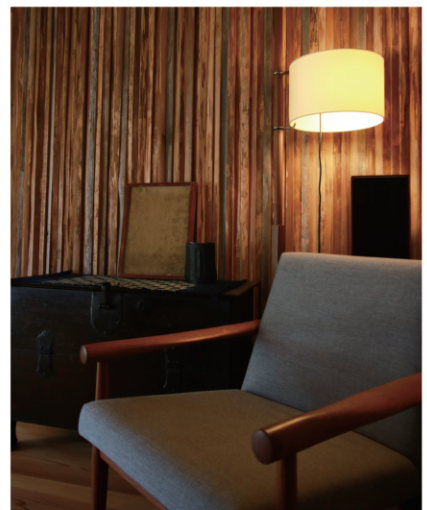
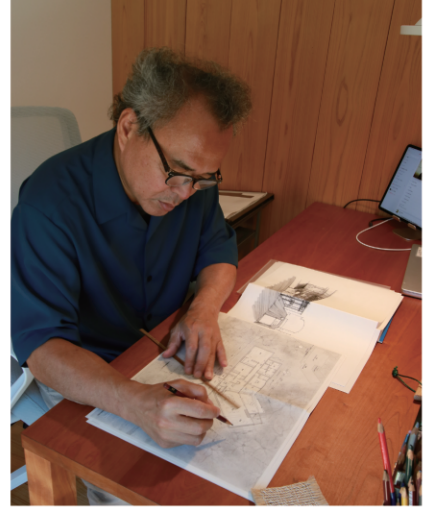
来しながら、建築をつくれること。それこそが、技術のある現代だからこそその贅沢であり、醍醐味だと思います。たとえば、今回使ったシュタイコのような木繊維断熱材は、まさにその“交点”にある素材です。自然素材の性質を大切にしながら、現代技術の恩恵を受けている。アナログすぎず、かといって最先端すぎない。そういうバランスの取り方が本当に上手いんですよ。悔しいけれど、ドイツはこうした製品を生み出すのが本当に巧みです。伝統に偏りすぎず、テクノロジーに寄りすぎない。本来、日本だって十分リードできるはずなんですけどね。要するに、自然素材を主役に据え、それを現代の技術が支えている。その構図こそが、これからの建築の在り方だと考えます。



——最後に、これから住宅づくりに関わっていく建築家や工務店、そして住まい手の方々へ、メッセージをお願いします。

堀部 多くの建築に携わる人が感じていると思いますが、今はまさに“量から質の時代”に移っていると感じます。戦後の日本は、人口が爆発的に増え、住宅供給が追いつかず、とにかく“量をつくる”ことが最優先である時代が数十年続きました。山を崩し、本来住むべきではない場所まで開発して宅地化し、住宅をどんどん建てていった。それが日本の近代住宅の出発点でもありました。それを今になって後悔しても仕方ないですが、1980年頃にはすでに人口減少が始まっていて、このまま量をつくり続けても意味がない、むしろ逆効果であることは分かっていたはずなんです。それでもなお、日本の住宅は“質より量”を優先するつくり方を続けてきた。そこはやはり、反省すべき点だと思います。

量をつくる技術は格段に発達しました。つまり、低コストで住宅を大量に供給できるようになったわけですが、その延長線上に今のさまざまな問題があるのではないのでしょうか。一方で、ヨーロッパの先進国は比較的早く“量から質”への転換を進めてきました。第一次世界大戦後、彼らも住宅供給難に陥りましたが、やりすぎた反省から早くに方向転換をした。日本は第二次世界大戦後に同じ課題に直面しながらも、その反省が遅れてしまったとも言えるかもしれません。だからこそ今、改めてその反省をしっかりと受け止め、どうすれば質の高い建築を、持続的に誠実につくっていきけるのか。そのことに設計者も工務店も、そして住まい手も一緒になって注力し、工夫し、知恵を出し合うことが大切だなと思っています。



取材後記

取材で実際に住まいを訪れ、足を踏み入れた瞬間、場の空気が整えられているように感じた。外部とゆるやかにつながりながらも、内部には安定した温度と落ち着きが保たれており、設計の意図が体感として伝わってくる。

印象的だったのは堀部氏が終始、専門性を感じさせながらも平易な言葉で語っていたことだった。難解な理論ではなく、日々の感覚や経験に根ざした判断の積み重ねが建築を形づくっていることが理解できた。建築がかたちになる以前の思考と姿勢こそが、住まいの質を静かに支えていることを実感する取材となった。





堀部 安嗣

Horibe Yasushi

住宅から公共建築まで幅広く手がける。代表作に「竹林寺納骨堂」「南の家」「小布施の小さな家」「上総の家」など、素材の質感、光の扱い、そして温熱環境を含めた“空間の静けさ”を大切にされた作品が多く、日本建築家協会賞、住宅建築賞をはじめ受賞歴も多数。「過度な装飾ではなく、本質的な居心地の良さをどうつくるか」という姿勢を貫き、国内外の建築家・設計者から高い評価を受けている。著書には『住まいの基本を考える』『堀部安嗣作品集』などがあり、建築教育にも精力的に取り組む、日本を代表する建築家のひとり。

| 主な経歴

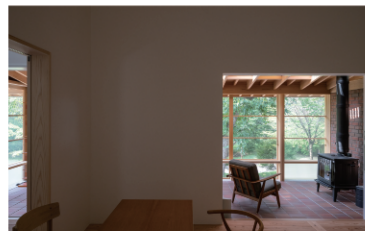
- 1967年 神奈川県横浜市生まれ
- 1990年 筑波大学芸術専門学群環境デザインコース卒業
- 1991-1994年 益子アトリエにて益子義弘に師事
- 1994年 堀部安嗣建築設計事務所を設立
- 2002年 第18回吉岡賞を《牛久のギャラリー》で受賞
- 2007-2024年 京都造形芸術大学 大学院教授
- 2016年 日本建築学会賞（作品）を《竹林寺納骨堂》で受賞
- 2020年 2020 毎日デザイン賞を《立ち去りがたい建築》で受賞
- 2022年- 放送大学教授

| 著書

- 『堀部安嗣の建築 - form and imagination』(TOTO 出版)
- 『書庫を建てる』(共著/新潮社)
- 『堀部安嗣 建築を気持ちで考える』(TOTO 出版)
- 『住まいの基本を考える』(2019年、新潮社)
- 『堀部安嗣作品集 1994-2014、II 2012-2019、III 2019-2024 全建築と設計図集』(平凡社)
- 『建築と利他』(共著/ミシマ社)

| 堀部安嗣建築設計事務所 建築作品 (写真提供: 堀部安嗣建築設計事務所)

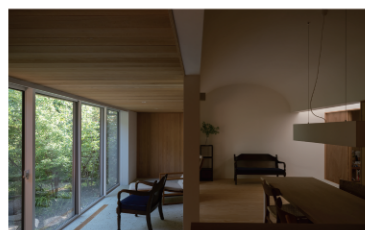
軽井沢の家Ⅷ



孤野の家



長谷の家Ⅱ



本誌取材物件で採用された木繊維断熱材シュタイコ

商品詳細は
こちらから



堀部安嗣氏の自邸では、断熱材として木繊維断熱材シュタイコが採用されています。シュタイコは木材の端材を原料とする木繊維断熱材で、断熱性能に加え、吸音性や調湿性を備えた素材です。

近年、建材はエネルギー性能だけでなく、材料の背景や製造過程までを含めたエンボディドカーボンの視点から、素材を選択することが建築の重要なテーマとなりつつあります。木材を原料とする断熱材は、木造建築との親和性が高く、建築全体の素材構成にも調和します。断熱性能だけではなく、素材のあり方までを見据えた選択が、これからの建築に求められています。

圧縮された木繊維でできたボードタイプの断熱材

STEICO universal dry

Combined sarking, sheathing and render board

シュタイコ ユニバーサルドライ

外断熱・外付加断熱



屋根付加断熱



外断熱・外付加断熱

様々な厚みに対応できる吹き込みタイプの断熱材

STEICO zell

Air-injected wood fibre insulation

シュタイコ ゼル

内装充填断熱(吹き込み)



壁の吹き込み



屋根の吹き込み又は天井の吹き積もらせ



堀部安嗣氏 自邸
建築ツアーレポート

建築家の住まいを訪ね、暮らしと建築を体感する



2026年2月26日、建築関係者を対象に、堀部安嗣氏の自邸を訪ねる建築ツアーを開催しました。21名が参加し、建築家が実際に暮らす住まいを体感しました。

堀部氏の自邸見学では、ご本人の案内のもと、住まいづくりの経緯や素材選びの考え方、実際の暮らしの中で感じていることなどを直接うかがいました。空間のあり方や素材の質感、温熱環境についても体感しながら学ぶ機会となりました。

参加者からは「建築家の自邸を時間をかけてゆっくり見学できる機会はそう多くなく、非常に貴重な体験だった」「堀部さんご夫妻から直接、家づくりの背景や素材についてのお話を伺えたことが印象に残った」といった声が寄せられました。

当日は、木繊維断熱材の吹き込み施工体験、プレカット工場見学、また施工中の住宅見学も実施。素材の製造から施工、設計、そして完成した建築までの流れを一日で体感するプログラムとなり、参加者からは「施工の仕組みや断熱材の施工方法を具体的に理解できた」「建築の各工程を順に見学でき、素材や温熱環境への理解が深まった」といった声が聞かれました。



Ikeda
CORPORATION

ひとと環境にやさしい住まいづくり
株式会社イケダコーポレーション

ご注文・カタログのダウンロードはWEBから



SNSで施工事例・イベント情報など
更新しています

Instagram
@ikedacorporation

Facebook
@ikeco.jp

X
@iskcorp

YouTubeチャンネル
イケダコーポレーション

ご登録
お願い
します

0120-544-453

仙台・東京・名古屋・大阪・福岡

<https://iskcorp.com/>